

静岡県

街道 1

静岡を代表する街道遺産の一つは、箱根西坂の鎌倉街道・跡(三島市、鎌倉時代?) **A** である。



鎌倉街道は、埼玉県を中心に多数現存するが(いずれも推定)、三島の鎌倉街道はそれらの中で延長1.5 kmと最大級であり、流水で深くえぐれた部分もあるが相対的に保存状態も良好と判断できる。鎌倉から西に向かうルート上であることも特徴で、ほぼ平行して残る江戸期の箱根西坂の東海道石畳(下記参照)が国史跡であるのに無指定のまま、今後の保存・管理に懸念を抱かせる。

街道 2

静岡を代表する二つ目の街道遺産も道路で、箱根西坂の東海道石畳(三島市・函南町、延宝8(1680)、国史跡) **A**、菊川坂石畳(島田市、江戸後期?、県史跡) **B**、本坂峠石畳(浜松市北区、江戸期) **C**などの石畳で代表される。



こうした石畳は全国で見

られるので決して珍しいものではないが、特に箱根西坂の東海道石畳は復元部を合わせると総延長4 kmに達し全国最長である。また、天下の険と言われたように東海道一の難所として広く知られ、広重の「東海道五十三次」や『東海道中膝栗毛』、諸日記、外国人の旅行記などにも登場するなど日本史の上でも重要な存在である。

街道 3



静岡県らしさとは関係なく、県下に1例しかなく、古くも大規模でもないが、非常にユニークで「行ってみたい」土木遺産を挙げるとすれば、西平尾の切通し(菊川市、江戸末期) **A** であろう。

切通しという構造物は、道路遺産としては珍しい部類に属し、どの県にで

もあるわけではないが、西平尾の切通しは、その圧倒的な存在感から、全国レベルでもトップクラスに位置する。恐らく、これに匹敵する切通しは、形態は全く異なるが、神奈川県鎌倉市の大町釈迦堂口遺跡の切通しと長野県麻績村・筑北村の青柳の切通しくらいのものであろう。

街道 4

静岡県、特に遠州・駿河地区にのみしか存在しない特異な街道遺産が鞘堂付きの秋葉山常夜灯である。その代表は、曳馬の秋葉山常夜灯(浜松市中区、文化3(1806)) **A** と、城下の秋葉山常夜灯(森町、天保4(1833)、町建造物) **A** である(写真は次ページ)。

秋葉山常夜灯は、火防の神・秋葉大権現を信仰していた秋葉講の人々により全国の街道、町中に建立されたが、秋葉山のある静岡県浜松市を中とする遠州・駿河・三河・尾張に集中して所在する。しかし、



その形態は、遠州・駿河と三河・尾張で全く異なり、前者が木造の鞘堂内に小型の常夜灯を置くのに対し、後者は江戸期の一般的な常夜灯同様、高さ3~5mの大型石造常夜灯の形態をとる。

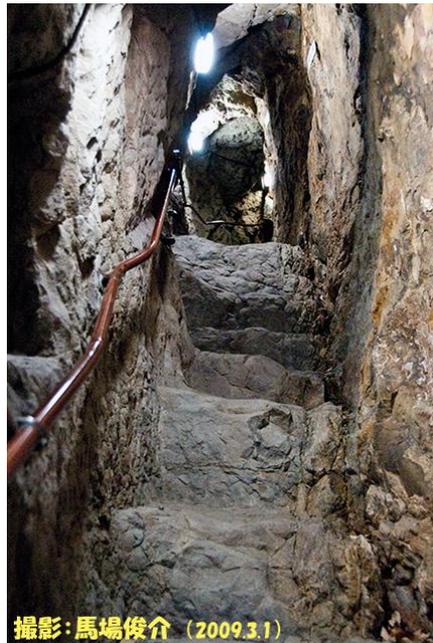
鞘堂内に置かれた小型の常夜灯は9割以上が石造で、三河に近くなるほど花崗岩製となるが、城下の秋葉山常夜灯のように、青銅と鋳鉄を組み合わせたものや、木柱の上に瓦製の燭台を載せたものも存在する（鞘堂内で風雨から守られていたため、様々な材質が可能であった）。上記以外に、Aランクのものだけでも23基が現存し、数の上でも静岡を最も端的に代表する街道遺産と位置付けられる。

舟運 1

静岡を代表する海運遺産は下田港と、それに付随する関連施設である。遺構としては、奉行所のあった大浦湾の舳石群（下田市、江戸初・中期）〔下の写真〕、下田港を風浪から守るための武ガ浜波除けと、それを築いた今村公の勅功碑（下田市、正保2(1645)、市史跡）から構成される（いずれもAランク）。



元和2(1616)から享保5(1720)に浦和に移るまで、下田には約100年船改番所が置かれ入港する廻船を検問した。その船を舳った船繋ぎ石（臼状）や船繋ぎ穴の残存数は全国最多である。下田港の防波堤である武ガ浜波除けは江戸期としては最大級であるが唯一ではなく保存状態もよくない。しかし、武ガ浜波除けを築いた下田奉行・今村伝四郎の功績を称えた石碑の存在は異例で、その大きさ、記載内容の克明さから特筆に価する。



鉱業 1

伊豆は戦国末期から江戸初期にかけて全国有数の金の産出地だった場所だったが、その中で唯一当時の姿を彷彿とさせるのは、龕附天正金鉱坑（伊豆市、天正5(1577)、市史跡）**A**である。津波のため埋没し、いわば絶対保存された形で戦後に“掘り出された”ため、小規模ではあるが、国内でも最も保存状態の良い坑道遺構である。

掘り出された”ため、小規模ではあるが、国内でも最も保存状態の良い坑道遺構である。

鉱業 2

静岡が秋葉山常夜灯と並び、全国一と言えるものは、江戸城の石丁場であろう。家康による大坂城の石垣普請に伴う石切丁場は香川県小豆島に集中しているが、その採石方法は花崗岩の地山から石材を切り出すという方式であった。しかし、伊豆の石丁場



は山中に散在する安山岩の転石を集約・加工する方式(小田原と類似)で、多くの大名が係った関係上、石材に多様な刻印が残されている点も特筆される。

代表的な石丁場は、御石ヶ沢丁場(伊東市、慶長18-元和6(1613-20))^Aで、宇佐美北部石丁場群の中核的存在であるだけでなく、「松平宮内少石場」(岡山藩主・池田忠雄)の標識石が残されていることでも知られる。伊東市の石丁場には、この他にも、小倉藩主・細川忠興、松山藩主・蒲生忠知など個人、松平隠岐守、久留島丹後守、尾張家、毛利家、稲葉家など採取者の特定できる丁場が数多く存在する。

産業 1

幕末期の製鉄遺産は、全国的に見てもほとんど現存していないが、静岡には、それらの中で最も優れた葦山反射炉(伊豆の国市、安政4(1857)、国史跡)^Aが残っている。葦山反射炉は、現存する最古の“実際に稼働”した反射炉と位置付けされている。葦山の先輩格にあたり実用炉でもあった佐賀藩の築地反射炉は、現在、場所すら特定できない状況で、有名な萩の反射炉も試験炉であったことを考えると、葦山反射炉の価値は高い。



防災 1

静岡のもう一つの大きな特徴は、大河が多く、それに伴って治水が重要な役割を担っていたことである。治水は、温帯モンスーン地帯に位置するわが国にとって、いわば当たり前のものではあるが、静岡には古さ、規模の2点で全国的にも有名な事例が存在する。“古さ”では、天寶堤(浜松市浜北区、天平宝字5(761)修築、市史跡)^Aが際立っている。天平宝字5(761)も修築年なので創建はさらに遡るが文献はない。

“規模”では、雁堤(富士市、延宝2(1674)、市史跡)^Aが単一の堤防としては群を抜いている。

この他、年代には諸説あるが、静岡市葵区の薩摩土手、あるいは、安部川の旧霞堤^Aも駿府を守る壮大な堤防である。



防災 2

静岡は海岸線が長く、砂浜の続く部分には海岸防風林が育成された。最も有名なものは千本松原(沼津市、戦国~江戸初期)^Aであるが、「松の小径」(焼津市、天保7(1836))^Bとして知られる防潮林は、保存状態の良さで知られている。

